

肺結核患者の性格と自律神経機能との関係について

国立療養所再春荘
成松孝人・奥田道雄

(昭和28年11月9日受付)

I 緒言

余等は1949年より肺結核患者の精神医学的研究を試み、すでに結核患者の精神作業能力¹⁾、並びに結核発病による性格の変化^{2),3)}についてそれぞれ報告したが、今回更に性格と自律神経機能との関係を知らんと思ひ、当荘入院患者150名、対照健康者20名に対し、性格検査法として三宅氏性格微標横断検査及び淡路氏向性検査、自律神経機能検査法としてWenger氏因子分析を試みたので、ここにその成績を報告して、諸賢の御批判を仰ぎたいと思う。

II 検査成績

1 性格異常発現率(表1)

対照健康者の性格異常発現率は20名中2名(10.0%)、肺結核患者の性格異常発現率は150名中51名(34.0%)で、対照健康者に較べ肺結核患者の性格異常発現率は大きく(危険率1%)、更に自律神経機能より、これら性

表1 性格異常と自律神経機能との関係

性格異常の有無		性格異常のあるもの						性格異常のないもの
性格異常の数		1	2	3	4	5	6	計
肺結核患者	交感神経優位者18名	5	1	1	1	1	9	9(50.0%)
	副交感神経優位者30名	6	5	1	1	1	13	17(56.7%)
	両自律神経緊張型22名	3	4	1	1		9	13(59.1%)
	正常機能者80名	8	10	1	1		20	60(74.7%)
	計150名	22	19	2	4	2	51	99(66.0%)
対照健康者	交感神経優位者1名	1					1	
	副交感神経優位者16名	1					1	15
	両自律神経緊張型3名							3
	計20名	2					2	18

表2 自律神経機能別による性格異常の種類

性格微標	1 爽快性	2 活動性	3 抑鬱性	4 無力性	5 過感性	6 強迫性	7 自確己実不性	8 意如志欠	9 爆発性	10 気変分易性	11 自示己顕慾	12 内閉性	13 粘着性	14 即行性
自律神経機能別														
交感神経優位者		(11.1%)			(22.2%)			(27.6%)	(11.1%)	(27.6%)				
副交感神経優位者	(3.8%)	(7.6%)	(15.4%)	(23.6%)	(3.8%)		(15.4%)	(3.8%)	(3.8%)	(7.6%)		(7.6%)	(7.6%)	
正常機能者	(2.8%)	(8.4%)	(14.0%)	(21.6%)	(8.4%)	(8.4%)	(11.2%)	(2.8%)		(2.8%)	(5.6%)	(2.8%)	(8.4%)	(2.8%)
両自律神経緊張型	(4.5%)	(13.5%)	(9.0%)	(23.5%)	(4.5%)		(9.0%)	(9.0%)	(4.5%)	(9.0%)		(4.5%)	(9.0%)	

格異常発現率を観察すると、まず結核患者では、交感神経優位の性格異常者が18名中9名(50.0%)、副交感神経優位のもの30名中13名(43.3%)、両自律神経緊張型のもの22名中9名(40.9%)、正常機能のもの80名中20名(25.0%)で、交感優位の性格異常者が最も多く、推計学的に交感神経優位者と正常機能者との間に、有意の差を認めた(危険率1%)。

2 性格異常の種類(表2)

次に、これら性格異常を各微標別に観察すると、副交感神経優位者・両自律神経緊張型・正常機能者は、いずれも無力性・抑鬱性・自己不確実性のもので、交感神経優位者では意志欠如・気分易変性・過感性のものが最も多く、副交感神経優位者・両自律神経緊張型・正常機能者の無力性、及び交感神経優位者の意志欠如並びに気分易変性は、それぞれ他の自律神経優位者に較べて、有意の差を認めた(危険率1%)。

3 結核発病による性格変化の程度と自律神経機能との関係(表3)

結核発病後性格微標が半数以上(8~14)変化した者は、交感神経優位者で15名中7名(46.7%)、両自律神経緊張型で17名中6名(35.3%)、副交感神経優位者で25名中5名(20.0%)、正常機能者で72名中12名(16.7%)あり、交感神経優位者と正常機能者の間に有意の差を認めた(危険率1%)。

4 向性検査と自律神経機能との関係(表4)

次に、余等は肺結核患者及び健康者に、淡路式向性検査を試みて、これと自律神経機能との関係を調査したが、交感神経優位者18名では標準型及び内向型それぞれ8名(44.4%)、外向型2名(11.1%)、副交感神経優位者20名では標準型及び内向型それぞれ8名(40.0%)、

表3 結核発病前後の性格の変化と自律神経機能との関係

自律神経機能別	1~7 変化したもの							8~14 変化したもの						
	1	2	3	4	5	6	計	8	9	10	11	12	13	計
交感神経優位者	3 (20.0%)	2 (13.3%)		1 (6.6%)	2 (13.3%)		8 (53.3%)	2 (13.3%)	1 (6.6%)	3 (20.0%)		1 (6.6%)		7 (46.7%)
副交感神経優位者	8 (32.0%)	7 (28.0%)	2 (8.0%)	3 (12.0%)			20 (80.0%)	2 (8.0%)	2 (8.0%)	1 (4.0%)				5 (20.0%)
正常機能者	29 (40.2%)	22 (30.5%)	4 (5.5%)	3 (4.1%)		2 (2.8%)	60 (83.3%)	4 (5.5%)	3 (4.1%)	2 (2.8%)	2 (2.8%)	1 (1.4%)		12 (16.7%)
両自律神経緊張型	5 (29.4%)	3 (17.6%)		1 (5.9%)	2 (11.7%)		11 (64.7%)	2 (11.7%)	2 (11.7%)		1 (5.9%)	1 (5.9%)		6 (35.3%)

表4 淡路式向性検査と自律神経機能との関係

自律神経機能別	向性	外向型				標準型	内向型			
		計	Ⅲ	Ⅱ	I		I	Ⅲ	Ⅱ	計
肺結核患者 124名	交感神経優位者 18名	2 (11.1%)			2 (44.4%)	8 (44.4%)	5	3		8 (44.4%)
	副交感神経優位者 20名	4 (20.0%)		2	2 (40.0%)	8 (40.0%)	7	1		8 (40.0%)
	正常機能者70名	11 (15.7%)			11 (38.6%)	27 (38.6%)	20	10	2	32 (45.7%)
	両自律神経緊張型 16名	5 (31.2%)		2	3 (18.8%)	3 (18.8%)	6	2		8 (50.0%)
健康者 20名	交感神経優位者 1名					1 (100.0%)				
	副交感神経優位者 3名					1 (33.3%)	1	1		2 (66.6%)
	正常機能者16名	2 (12.4%)			2 (31.3%)	5 (31.3%)	6	2	1	9 (56.3%)

外向型 4名 (20.0%), 正常機能者 70名では標準型 27名 (38.6%), 内向型 32名 (45.7%), 外向型 11名 (15.7%), 両自律神経緊張型では標準型 3名 (18.8%), 内向型 8名 (50.0%), 外向型 5名 (31.2%) であり, 対照健康者 20名も又, 標準型 7名 (35.0%), 内向型 11名 (50.0%), 外向型 2名 (15.0%) にして, 肺結核患者及び対照健康者共に, 標準型・内向型が多く, 外向型は少なくなっており, これと自律神経機能との間には有意の関係を認めなかった。

Ⅲ 総括並びに考察

余等は今回, 性格と自律神経機能との関係を知らんと思ひ, 肺結核患者150名, 対照健康者20名に, それぞれ三宅氏性格微標横断検査法, 淡路式向性検査法並びにWenger氏法を試みたが, その結果肺結核患者は対照健康者に較べて, 性格異常発現率高く, 肺結核患者の性格異常を自律神経機能別よりみると, 交感神経優位者に, 性格異常及び結核発病後性格が高度に変化したもの最も多く, これらは副交感神経優位者・両自律神経緊張型・正常機能

者の順に少なくなっており, 更に性格微標別よりみた場合, 交感神経優位者には, 意志欠如 (気移りしやすい性分), 気分易変性 (気分がいらいらする性分), 過敏性 (何事にひけ目を感じる性分) が多く, 副交感神経優位者・両自律神経緊張型・正常機能者には, 無力性 (心配事が頭や身体にこたえる性分) が多くなっており, 向性検査と自律神経機能との間には, 特別の関係を認めなかった。

今, 自律神経機能と性格に関する文献をみるに, 杉田⁴⁾, 高木⁵⁾ は解剖学的に, 感情の中枢と自律神経の高位中枢が極めて接近している点より, 両者の密接な関係を想像し, 林⁶⁾

はParlowの条件反射説より, 精神状態は交感神経系の亢奮により最も影響せられるといい, 深津⁷⁾ は薬効学的試験より, 交感神経緊張傾向のものは副交感神経緊張傾向のものより, 顕著な「場の反応」を示すと述べ, 大槻⁸⁾ は, 副交感神経優位のものは, 寡黙・順応・無抵抗主義, 交感神経優位のものは, 多弁積極主義であるといい, Wenger⁹⁾ は, 小児において, 副交感優位のものは交感優位に較べ, 感情制止強く, 興奮少なく, 活動性に乏しく疲労し難く, 辛抱強く, 規律正しいと述べている。元来人間の性格及び自律神経機能は頗る複雑であり, その的確な検査方法が未だ定らない今日, この両者の関係を正しく見究めることはなかなか困難であるが, 余等の実験並びに諸家の文献よりみて, 両者の間に何等か関係のあるのは事実のように思われる。すなわち交感神経優位のものは, 「場の反応」に過敏で, 感情激し易く, 多弁, 反抗的, 副交感神経優位のものは, 「場の反応」に鈍感で, 感情を面に表わさず, 寡黙順応型であり, これは余等¹⁰⁾ が, 肺結核患者に試みた軽症者に副交感神経優位, 重症者に交感神

経優位のものが多い成績と照らし合わせ甚だ興味ある現象といえよう。余等は今後性格と自律神経の関係を、直接因子分析を用いて探究したいと考えている。

庄長坂元正徳博士の御指導御校閲を深謝する。

文 献

- 1) 成松・椎原：日本臨牀結核，10，632，昭 26.
- 2) 成松・小川：臨牀と研究，28，949，昭 26.
- 3) 成松・奥田：臨牀内科小児科掲載予定.

- 4) 杉田：日本臨牀，8，昭 24.
- 5) 高木：精神神経学雑誌，44，昭 17.
- 6) 林：条件反射学説，昭 18.
- 7) 深津：名古屋医学会雑誌，65，昭 26.
- 8) 大槻：精神分析心理学辞典，昭 26.
- 9) Wenger：臨牀と研究，29，昭 27. 勝木による.
- 10) 小川：結核に掲載予定.

